



Handwritten text in cursive script, likely a title or author's name.

金



舟中記

上

雲松長流のこころを成すは竹露
伊賀の神祇ありて那波の浦に
若の若葉の生れるは十とせあも
あそびやちをぬくは平昔の
破麩のこころを賭すは名を
千馬の鞍とあつたはう競馬の
あそびと志願の終無利といふ
陰氏となつてするは日月の
あそびのこころを成すは竹露

昨の東のの移り一ををを
 富まぬとをををををををを
 うかふ御一几維の地のや
 山一印一丸山岳千草名
 己かた中と印と一は道の為
 なる一四時の名よををを
 虹河神と動一玉門一筆成
 海一の澤の着一集一儼其
 多形の海をぬ一ははのをを

石の...の如

太白堂

虎都



腹筋はふる新を廻るを祭神叔
出合く見れは仙侶の友 氷夜
河信重といふも是も古の仙侶
定まらぬ事や編み赤雲 靴筆
水如音合谷水袋り笑ひたり 芝柏
初の日柳の連はとんこり 己意
位可なり事と云ふ坪 其角
又さう終と 舟西風なり 嵐雷
中川水物の感や養の秋 氷

肌をのび肌乃ち産綿 杵降
俗人如是な習ふ産月 仙化
衣は舞多なり湯原乞伝 秦湖
歳世より物取は寸草の陰 素秋
山吹あはれもろ子病う加る筈 沾徳
二 輕吟く世を揺るまの風 其角
あはれもろ子の病う加る筈 素秋
下戸は如狗りおひのけり 女裁
正所なまじり 長柄 芝柏

備後志とらふ事く 実徳教

堤亭

鳥の多し中は年々二度宛

沾徳

鳥屋野鳥く名と云南房

桃隣

脚を了くく 京如能をせ

喜角

中事り同電の古くあひ

奴我

兎角信りお寸大名に令

仙化

舟を帆り生魚送る秋の丸

喜秋

是と七行り子福甚事お甚爲

桃隣

京都りて 能信り月のみ

東園

角力とらふ人たりり

嵐島

透る水く 灣を海ぬ大核

其角

笠野りて 帯紙捨弁

女我

女あらしる事やをる所ゆゆの翁

喜湖

よにほひ代りり 佐也ム七 化ケ

芝宿

けむる扇をあつく骨らるる

女我

尺華の華 乃一時

喜秋

四角すたる事法りひれ秋繼

已應

屋板より舟 腮をその月

堤亭

敵く戸又裸く出るは家 沾徳

垣を廻るは 仙化

鳥さしは 柗隣

真まぬは 嵐電

足は河原川と 其角

足くは音紙 堀亭

之 多指ち外は 栗洞

拾ふた 素秋

志はれ 柗隣

神も 仙化

村も 其角

古はまは 其角

話の音も 堀亭

おとハ寸あは 沾徳

隻ふは 其角

門か 柗隣

夜茶も 外我

あひは 堀亭

吸く如く細く調うて空の月 嵐者

是を泥す 踊子如く 沾徳

品川の横所 ^之 柿 淋 苔かつ 桃隣

物川かやまやまの臆病 苜蓿

嬌りたるおとくちの衣引子 沾徳

過世いづゆるやうく 田刈 其角

わろく及付本成きく筋成る 翠亭

泣れく急ぐ世の恥を侍 女我

大黒を棚う ^{あつ} けく 守りん 嵐者

吾娘をくりぬく 寸守 危 素秋

厄年お水食も二時迄ゆきあり 東湖

上代中を乞巧の文 桃隣

らんぬる葎色お立月お音 素秋

傘を逆うし 扇守 音雨 已磨

物々しく白田あ祭草一衣 東湖

岩又入り 女まら草お音 女我

石 尺かけより信地維も信く 桃隣

子も如く ぬるのきも 東湖

望人と傳ふささとあそぶ
遊ユ以高し 朝之粥煖 女我
嵩如海のほろし 草と花の軒 岩雪
若舟〜花散成脱てもる毫 治徳
雨空や〜舟の写出守日空白 芝柏
さうねあ〜あ女湖如氷 桃隣
消る〜花時西白〜さ打露 堤亭
閑所〜あ月如明〜人音 仙化
根をふ〜て牡丹を梅守石如向 柳隣

生る知ひを油新色 其角
之を梅者之 階よよこさるり 堤亭
う〜み〜面をそ〜つ〜れ 女我
郭らき〜う〜め〜り子母 意なきし 桃隣
躰を捨〜く 命ハ取勝 丸 東潮
女〜く〜女友た〜ら 和申 振シ 治徳
何〜ら〜温守〜り 中平 立〜け 女我
之〜つ〜川をき〜寸火煙者〜る 腐シ 岩雪
梅寸卯の意〜し〜り〜と〜き〜れ 仙化

蝶堂了寐起を安く年と経ん一糸
塀了根一水從成龍已應

遠く一水かり一糸用雅

心もくゆく見たり一糸を窮ふ

岩城山と勢いある香あり交布之 桃隣

梅首雅の群々る方と玉河 露沼

引起寸短麻糸柳打やうく 助史

樂屋如札を借の語水 浜徳

坂ゆりし門と音もまはれ月 沾荷

籠山廣く出ると草 知石

新蕎麦又口舌匂ひく濃葉の 芳津
土室 如鈴も濁るしる雨 沾圃
引きよハ礼日髪を曲さす 魁石
何を訊ふ母 子後ふる 桃隣
志帆なる 播下海色に走ル 露沾
福ちれし 杉と庭よりくる 助叟
新葉條茂取をを水清みく 沾圃
多留如あふ母 志れぬ打紙 芳津
船桶を備うて 漬る宵は月 沾徳

板を隣 水く 此地は楢の木 沾荷
完熟伏出せを志れし以てと 魁石
河生紙柄 心 深余の語 露沾
浮重如雨 斤寄 雄の声 助叟
文字酷 筏をや 善徳めく 沾徳
長嘯如響く 暮れ け所 桃隣
厨り 遠く 弱る虫の音 沾圃
雲州 影も病も病も 唯礼未 沾荷
歩り歩 如後 不 音 月 秋 魁石

母のまはるゝとあんと古華院 芳津
 新まをの御出る幣串 助受
 川登寸板名あまの脚子又 露沾
 二人天象と入ル 爰以是 桃海
 夏海あまの体なるん以易さ 沾徳
 蠅了 菴あまのそめ生 沾荷
 水行く女新衣流寸能死川 助受
 勝多夏腐の味を冷あす 芳津
 忘れんと思ふを嘔吐 粘やま守 沾國
 面く 硯川 粘寸 床 露沾
 何れ崖を竹の舟持りり意あま 沾徳
 地及るる守を 喜あ 遠系 粘谷

沾徳岩嶽より舟渡あまの葉の体は
 又春の御守の体

元禄六年二月十八日

人麿講巻序

凡又東叡山や 華の種 採風
 是古地よりも 延ぶる白雲 仙化
 漸月赤貝舟の 油帆引て 金峰
 四五芒志れ寸や 調園の 氷花
 兩箱代物の中 下るよ下る 暮
 滞り せぬる ちね 暮つて 暮

風伐火燧り 遠く古和城 枕邊
 修り 歸り けし 御 舟 万巻
 竹の 瓊純丁 下り に 塵 降り 暮角
 山 水伐 流し 小田 系 舟 危 枕
 昔少 解 一 日 二 三 舟 とも 暮 氷花
 髪 此 鏡 目 の ゆ る 又 姿 見 仙化
 駕を 椽 ち ち ち ち 武 士 あり 暮
 一 里 お かし 音 大 井 川 暮
 新 一 垂 ち 此 舟 の 標 ち 暮

道員好する京北付合 氷花
糲チリ去去 滋を告り小茶如懸 万巻
物を隔ぬ 蛙 江 鹿 柳障

芭蕉翁述為如散句於鄙門人如集
毎に歌——竹道と旅泊の竟界
此東と云及わるる席くくわく云控るる
句節と其敷志如寸秀とるる去世——
初らちるる人——年と云あぬ志れ
そと遠境如草者又傳と云解く
手不美如遺文字の根と成りん毎
憶ちる寸蕉門の志不如人を日十本
是を如美とるるもの如と稱ふ如

梅の香りのけと目にも山は成
常や耕のうらら藪あふ
傘のり押分るる柳の
ハ九間空く雨降耕外
多柳の泥志もくは行
水より代物りぬぬ重重
雲雀鳴けけ柳子や雑草色
既済とやとおき鶴一組は
辛一済水ねお花より激しく

あまの橋の本とのや谷は老木の
いさよすあまきおあまを
あまをいよこあますま
一橋あまのけあま
あまのけあまのけあま
あまのけあまのけあま

あまのけあまのけあま
あまのけあまのけあま
あまのけあまのけあま
あまのけあまのけあま
あまのけあまのけあま

如列白鳥を網

くまきううまのゆめは梅

東叡山

口のめさめ拵り反意見たる糸

あつしよの柵藤とふる

程ら甲一益有め神の顔

糸屋も意見めたては七巻糸

翠湖水惜春

けまき紙あのみの人と朽こころ

其部

鎌倉といさく出りて神機

本のかく藤摘のゆめや都么

京あくも糸る流りや時を

布とあま啼やあまのあやめ

川流

野を横へま川もあやめ鳥

深川

鷓鴣群や横へま水のこ

不卜一周忌 琴風集行

杜鵑鳴音やあふん硯ここ
卯茶やふん紀柙の及こく
駿河路や墨檣も華れ白ひ
紫陽草や惟子時北河津黄
あふん海舟一棹る白を兼と並
夕子朝子ゆ子凡の花
鳥や菊菘一巻を啼
糝法よ行も一巻を顔髪

六月あや香煙の葉乃畑

燕漢新完 自畫目録

空かぬ霞や牡丹の葉は蜜

石山一巻をく

先物心推のあふん交あま
子芸草よ登歌吟あ凡わん

那次温泉

湯を心よあふんお新あ産水

教生石

石女香や 友よあはれ 扇書

信ヶ川等初集也

此流如くもや 鼻の田種奇

一はしこ

群写水雨や 西院の合歡草

西のさくら

中野や けしき又 深む波の底

負家舎

登風馬 北原 草子 ちんちん

端牛 南のうわら 又 流すあ

蜻蛉や ちんちん 又 草子 又 流す

流すのさくら

山月や 家系 雨雲 又 流す

流すや 流す 流す 又 流す

尾引野水新宅

流す 流す 流す 又 流す

梅部

文月や 山月 又 流す 又 流す

この稲花香や分入 在るあそびう海
あつくと日暮はきねりも 秋の丸

古田神社 宝物寶威鏡

じさんや子甲女下のきりく寸
胡蝶のさだりく秋あるきねり

加別一節巻下信

塚とうこあふ 函後きき秋の丸
高水より早も 旅宿や 志はれと
きくてもあふ 古田神社のし

あふ雲を輪雲は侍多あふる

女中澤桐室奥の

城へ流くはるや 東あふ堂川

古の巻

一 家管白髪一 枝や巻糸
紅葉や志くぬ 女中室の巻糸
名月や池子のうきく 秋の丸
夜うけく 名月異あふる
名月や川 古の巻糸

敦賀ノ事

骨や小四日初とて先を記
夕形や梅の向くのゆくと

對信陽山人

水梅や手紙のちきり雲を味
表生れ吾試問よしもまの菴

重陽南都一宿

華の香や高良はたかふ佛を
空しくなく麻声出しく花の庵

見西のあふや世を此後の三葉
葉は後古積のぬまよれ

大板芝柏集り

梅のうま隣を何をさるくろ

冬部

風出音

花を記し山初めて旅を傳
炉室や石古き行旅のぬれ
口切り煉の危をなつしな
着れ葉の母とく見とけり
とるのぬれ

鶴舞り小指のまきくち櫃
匠のぬ指のまきくち櫃
とむきくち櫃のまきくち

一 前もあらうぬまきくち櫃
乾種も空色の夜もまきの
いさくせそ雪んよ物ふ前まき
いさくせそ雪んよ物ふ前まき
まきくち櫃のまきくち櫃
金屏のまきのまきくち櫃

燦拂ふまきの櫃物まきくち
鬼も角もまきくち櫃
神宮や水仙のまきくち櫃
雲のおやまきくち櫃
坂のまきのまきくち櫃
指のまきのまきくち櫃
まきくち櫃のまきくち櫃
まきくち櫃のまきくち櫃
まきくち櫃のまきくち櫃

長きものと雀のあしは出さぬ
 分別の鹿のあしは出さぬ
 鳥のあしは出さぬ
 蛇のあしは出さぬ

春部

梅咲くも水角出寸 菅原 露
 いへえよ鼻毛枯り 和歌 調和
 鳥水漲く 遠守 志
 又二町 梅 山夕
 春水也 蟹 嵐雪
 新田 月 奉白
 月やあらん 御幣子 石角
 田螺 九田 世輪

藤原のや 灯の白く毒の枝

玉秋

口ぬきようくく 庭の清水の

蟹春

浪もかきと 夢の結たるうた

女我

鳥籠の風や ころも揚る

艶士

海より 記のまじり 雛の令

神教

人か書ふ者く 見えたる面え

琴瓦

神を信ずるのさりとや 玉柙

柙子

菖蒲の名も 同んふさく

李重

仇のまじり 花をむく柙

凡調

見かく 歯を 冴ふかきる 毒の巻

臨江

守りたる 毒の枝 戦え

同

綾舟の 麗るん せんさく 良将

警秋

花聖柳 花のや 隅田川

八色

梅を折る人 編笠よ 思相成

七磨

海棠や 唐のまじり 花の東縁

字月

家主へ 戻成向る 草の苗将

蟻歩

くもとも 後より くる 蝶

礮水

若船や 花のまじり 水は流る

三舟 槿堂

しき振る方ありし

ふあう百里の物やなほ

旅波 ちよ

乃これとすしりお練井

野坡

人お振る可き思し一花お心

花園

塞うるや振るし並ふ徳あり

直危

橋將傾城詰し一人お

徳信 橋山

おあきし一人おぬら山橋

孤屋

おあきし奥あり。京の星お

濃 柳

川之流るやくお柳お

濃 柳

朝起や 結るるお壁新紙 今 午川

旅行

おあきや 山ありおきく 玉津橋 今 文鳥

百堂おしらふ入しりら 志お菴 雲

橋目や 意の上漕帆のけ舟 柳

初雲おきとや 初雲お後山 圓風

碑 石に 柳お 澄お 柳 水 氷

お波より 例橋おきぬ 柳お 桃舟

おあきおき 橋おきぬ 陽田川 桃明

花鳥のふりふり 一之十 白文考

註引 歌集のそとに

物とらへく行かぬよと人毒柿 白文考

春風の晴く属せ光の如 白文考

紅く水く後も立ぬを玉の付 白文考

毒の毒くくさくくさく 毒水 白文考

雲連くく原りさるかき 等歌 白文考

那波津や水の星候くく 等歌

藤のたふらん通くく 等歌

あの人歌集より 定れ毒 今

梅候や 長後藤は布衣候 今の女

世の中や 古根はあまの友のうに 桃御

只増れ彩を長寸 袖さく良 竹筒

号れ栲皮は日影 あさ日一の如 堤亭

おひよふ人おひよふ 勝日 不願

总守の事や 寢る庭の下 桃燈

雨風くくくく 消れ 馬車

花一重 庭のまへに 蔵より 菅葉

帯布とに川を流るく遊下

沾徑

海苔取りの毒ふとんる山

天州

目如筋や流るく流るく相蝶

智 等芳

美雨や 苗見反代り物水

名古屋 仙来

茶紙振く流るく及姥や山所

全 董芸

雪雜草 訪

卯塔如系々く刻し日影の如

園山 兀拳

人あお色 腰水伴一の毒水

村天

喧嘩とるる勢多き流るる

浮生

逝くと若人いふはささる

三木 伊代 文車

とくもけは代流るるんよあつたき

湖松

花よあく物重流るる

馬年

咲かふる花如星りや井戸の

白柳

逞手まも腰りや美水雨

桃都

陽菜や 上り坂り牛の面

新真

女我身

磯山や海へ打也の雛の存

茹毛

梅如雪湯屋へは流るる

冬市

加るや苗花料、此の紙所、
結少

埃古も書者能れぬや、
少増

庭第とれとて、
秋園

白雲の一、
秋園

於るや、
久亭

如う、
其角

如きりや、
嵐雪

雪や、
以我

おふり、
荊口

七将や、
根部

立志具列

凡雅なる人、
志言

携り、
冬菊

書や、
梅

り、
昌長

おんゆき、
同

ふん、
彦柱

ふん、
同

花よりよき月と花は柳花 等燈
のより馬の蝶候柳 くれ 馬車
馬柳 一り念取かりり月 松風
こほ候花生馬や 梅乃道塞々 柳子
とよりつて 荳あまよく柳小 海初
出智りや 乳の目利の一の筆下る女
煙鳴とされくや 水如音 山形 凡山
柳 一り水始キ 月より柳月 同
梅咲けり 隠者時古き 柳都
ちき漸 たる 若花 若くは 若 若水

阿久津川より常陸へ過る

山形

川より花後原よりまき水 風陽

奥若目

手柳子と屋 さらさらのきり 如約

沖水石より水 汐干の酒香瑞 文章

四精 菟野 (雄子) を送る 山形
四尾 小 瑞より 他より 山形

山形

ひさし 水や 芭の雅三 齋より 新又

池をこえ

水もなや水 移ふ 集れ 装 方西

子記

暮れを暮や七つ出でて山後 柳都
 梅の志摩や 女は鼻のえ 重行
 牛追の責成せぬや 水菜橋 南水
 編笠お細も付しり 暮れ雨 止氷
 花あゝく 呼声 絶 青澤
 暮れ子 目老 何れも 藪の妻 親山
 田文 海くさぐさのちり産はよめる
とく 危なく 何れよすくに
 さくら花の 暮れよ 暮れよ 暮れよ

陸江

夜雨冷

夕月 雨や 硯箱 なる 番椒 嵐雲
 暮れ 暮れ 一 雙 子 苗 一 株 柳都
 風くさぐさの 柳の 柳の 柳の 神歌
 梅魚の 梅の 梅の 梅の 冬市
 節室の 節の 節の 節の 柳都
 借し 扇代 暮れ 暮れ 嵐雲

花くしり四石八木しり根 市

盛し如胃をを 従外セ 叔

糸麻より糸成るに、海好意 雪

宿替り居替何とありて 都

飄渺く世間をゆく半はれし 叔

石落や 活桶如雪成る 市

空をれ海成る 佐之丸 都

是も少多如中 雁令 雪

多如下の君さゆれく 屋如月 市

釜火如立場あれと 呼り 叔

あゆみしれのくまを真意 雪

羽織如い如美うたひ 都

管行く海く時豆成る 叔

一人如女等成遊より 市

さふち如お遊く 八ツ時 都

海し い凡く雪隠へ 雪

海舟し 根もたふ 市

イ下ぬ 骨牌 叔

けはち君りと高き冷光體雪
板キ刀ノく遊りれさる夏 都
遊守、福、やくと、巖、や 叙
茶うけの中は、篠山の澄市
此後子か言、如、今、月、も、照、部
龜吉、秋、つ、節、意、ハ、之、新、吉
順、乃、子、も、濁、水、り、又、新、も、棟、市
糶、を、儀、り、り、か、何、く、重、信、傳、叙
陰、飛、ハ、新、を、皆、上、可、也、名、所、也、く

人、下、を、け、さ、も、一、代、の、換、都
う、紀、物、を、新、新、新、り、雨、叙
榮、耀、り、な、り、ぬ、え、日、の、夏、市

面六句

水母月や友成路へ 南向 翁和
 凡川落寸又高水前 東江
 雷が好物なるをと西かしへ 袂屋
 雪のうらむ成存ふ山坂 梅旭
 鳴くも其ぬ望吹志る桂歌 常又
 矢如海もあま 翁智恵松 執筆

仙臺松山氏其行 山川の宿と
 流寸

凡成權く法水也 龍吉喜多事ふ 松部
 郭ふつさあしとみ寸 流和
 後へつる本具る羅打かたき 此受
 五浪水跡を皆物多なる 千調
 定少月和の通うらむ西水方 獨笑
 御不持つるきく曲ん 漁舟 翁
 酒をよやちりくとして新 枝人
 首の羽織をゆあ水橋と寸 年角

遠くを乳守の乳と けりきよき
玉陽

坂あをる如神門の如き
法玉

明れ如れきうの如き
晚滄

茶碗を割く如き
有角

いやなる如き
流和

昔の如き
根部

空の如き
千調

行る如き
如曼

若くは如き
玉陽

愈々如き
根部

門を如き
有角

舟を如き
如曼

月や如き
如曼

舟を如き
晚滄

地へ如き
有角

雨を如き
流和

銀座の如き
根部

之如き
有角

文儻く便如座、押臨治玉

さしなむ半のハラス多佛結実

又神へ通れし小宮に雲千個

二寸又唐く打直ス掬技水

法書一カのハ〜及漢書治玉

南都〜を物〜京紙也加玉湯

句高水中〜燕尾や免ス批部

秘〜ていさぬ成如葉其也物受

船娘の〜を〜と〜是如月治玉

秋も蚊帳を好、傾城晚陰

雛よひ蒲菊と隅〜一也流和

礼もいさ守り〜摩〜舞舞

関方程〜実〜筋之浪河物受

二里十又〜牛又高旅批部

子我〜榎乃白の酒所有布

禎貴〜〜〜〜〜玉湯

苗如浪橋の寺〜晚陰

蝶も〜を〜〜〜〜八角

二時麻れも物くまのあ 馬年

空のふらふらと物くまのあ 空

又燕水魚急々 梁 桃郡

海ももあゝの空の坊 桃郡

威をばし 多祥望遠の句 石城

雅を田舎の水よりあゝ 馬年

近日はうらむをせざる二時 桃郡

所懸れ流と一夜の晝夜 石城

は浮由り 何鳥の啼 空

百の舌鼓りれし 松林 桃郡

甚所を管 祿と 山伏 馬年

先福の畜るを急し 柳 石城

帥気の果々 尚 卷ル 意 桃郡

あしくと麻れぬを流す月 空

あらうとさけく 雲のたてと舟 石城

羽如ゆけと物より 鷹の毛をキ 馬年

馬田のまもまふ 麻の糸 石城

柳の糸のゆる 換ル 石城

柳の糸のゆる 換ル 石城

西礼者古人

こまら

表漢

調和

長控乃

茶

了

いふ

袖

格



みち

うら

涙

くさ

味噌

茶の





おの

あ

おの

おの

あ

あ

あ

又字掬の石の面

六十八寸

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ



あ

あ

あ

あ



酒の
うら
の

秀和

あし

よは

あ

あ

あ

あ
藤



一人の
あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ



如昔妻の神歌

あゝ今初らん

毎論

旅をしましり

さつしや

ワツシ

の房

二人

連



象沼の腕を

旅山路

さへ

善の

と縮

志さみ

計



一峰

河内深川

夜に降る

露言

列

汲糸の

子

たり

見ゆ

る

の



目新方衣也

時

行敷

花や

相言

出給

乃

藤原



高秋

去島人

心算人

艶士

貴人

花子

巧せ

料理

食



古人の跡と

意の事

浪奥隈

波系年

千鳥裳

袴三みゆ



常陽

千石くらの物ゆゑ
たゞもなむ糸の後
狂極

濁り

はら

らん

筆

の
後



一か端出らん

善
時
月
雪

乃

子

の
幣



筆

子
星

の
幣

梅

花

立
嘴

一、夜去首余の途
酒も明
少枝

久気年

恵以類

榮仁以

佐義天

加過

連

閑利



長途日毎愛

乞食

一

新
人

臨
年



神叔

慢
人
心
心
心
心

懶
列



其
角

虛
空

風
中



情
曾
列

嵐
雲

此酒をみづれくはるる
東湖をまがのふりし
他の階別は安んず

此は美蕉存、あはれをみひやく
たし先師の枝折を尋き島の
夕陽輝浮の朝旭とそまらぬをま境
陰しふは流流に江邊に漸れり
里は明子の難ありた存のふり衣り
かれくちり、此旅は首途より
像は存せしもの、この畫よりしるし
侍りぬを、この旅の古葉にせしん事
ゆきぬくと安んず、あはれし侍りぬ

名もや 蝶の巻 蝶の教 立志

凡そ 酒のささや 河馬 淵泉 深川

和名や 白文胡蝶の二つ連 深川

人北口乃 是く通ん涼くれ 千川

蚊杓や 是く是れ凡の事 素秋

水邊や 自如敵悔の事 風調

出千や 人北義成 右名石 桐葉

豆狐福あり 海や田種 龜 石言 仙木

並初や 二筋 通ん蝶乃 名 孤山

別産や 水乃 可なり 六月雨 檀堂

菘虫如 仰て 是くは 海に 葉下

日言や 是く打 虫乃 葉下 白原 之れ

更言 智ぬ 是くは 是くは 蒲園 祖都

端平 是くは 是くは 車牛 志言

六月雨や 是くは 是くは 切や 冬菊

是くは 是くは 是くは 是くは 授指 弟 少増

水葉 是くは 是くは 是くは 是くは 神水

是くは 是くは 是くは 是くは 山名

夏草又報指し一て尺ををる 惟然

水争う己の身は知凍の氷 立鶴子

一嵐比良のうらや藤舟舟 氷花

記蕙の情おもはるや石の冬布

涼しよ柳は借りし 加藤衣 風陽

袋士の流くく 涼のれ 等盛

新筆より地り水 秋の川馬 九梅

浮世の草や 苔染の水難き 真義

蓮草のぬきとをく 利根川 艶士

世依やお、おろてよの川で数葉の 松山

柳葉や花片し 一の部 音汗

江戸の暮れあはれ此小籠の 九梅

筆やゆきと川を極る下 蘭水

髪をうす髪は干りし中凍 松花

橋や高き此ま吉の古女香 春桐

一書の上

僧

呵々々 有ましくは清水 白仙

神懶くもや眼を涙せん 臨証

麦秋多し鷹狩り下小山伏 女磨
 蓮足や春よりあはくは編 横袂
 川流や新刻に河津川流 常湯
 春のきり銀のそ ちるる貴人 白糸
 色影や妙より眼く海流 如海
 菽垣や 蕈より交り 鳥爪 桃子
 唯長くも春癖流し 雨 田風

夢想

垣石月又水の出る形も 菘蒲菊 李里

徳平

三河町新井高浦や如ふつる 秀光
 音切く浦 関代源と流す水 権堂
 松苔の声は富や 雲の岸 朝見
 菜草や挽むる ちるる水 新真
 郭公ぬ山物お所り 柏十
 深川の末や 中一の茄子 将 桃都
 六月雨や枝や 探る井戸の上 権之
 涼小控く 流るる水 立橋子

屋敷の帷子に香もよみたり 仲礼
幅廣く声も高きり 郭公 神叙
聖麦散く泣きけり 宇月
班猫共あそびにたり 呂茹
杜若並能草の香もよみ 昂堂
少りし富士も富士に下り 桃都
心算なる誰の事なるん 秋老

膳列

又見えん梧桐の葉は 祝種 柳雪

黒文蝶飛臨白く 凡平 柳軒

首交

引裾くらのふれり 文貞 志安
五月雨の葉は 盤谷
卯酉や立返るる 秋田 藤堂
けしき 花はかりん 子喬
五合帆は 友吟
うさぎの 林翠
あはれ 子鳥

夕涼女 夕涼女 夕涼女 夕涼女
立帰 立帰 立帰 立帰
更衣 更衣 更衣 更衣
甚尺

撰結集

一間の底 牡丹 牡丹 牡丹 牡丹
尾身 尾身 尾身 尾身
福瑞 福瑞 福瑞 福瑞
盤 盤 盤 盤
お別いせ 京

底 底 底 底
朝海 朝海 朝海 朝海
都 都 都 都
珊瑚 珊瑚 珊瑚 珊瑚
松 松 松 松
筆 筆 筆 筆
一 一 一 一
京 京 京 京
山 山 山 山
車 車 車 車

垣毎一 遊りえハ行 杜々 江穂

頼のぬれ 一かくらや宵は雨 志存

あは是入とてさく

仙居

け鳥お遊向のぬや 亥は月 半水

朝露は烟のま 縮み 祐禰 村矢

机下 竹伝曲

お月や人のまぬ向は 志 裸 杜部

菫草や 涼のむら 一 浮生

越凡とゆ 海子 満く 涼るらん 橙亭

元龍梅

吟法めく 是も 梅あり 秋暮 貞碩

故園葉や 痛く 子お 側を 憐れ 石成

お月雨 懐任 葉さう 石平 記 衣吹

花さうて 詞子 整さう 松の 蝶 概紙

園ハ 杉葉 影増え 清水 うる 鳥下

海香 心 影や 蚊を の 細明り 等野

時鳥さあつさ ころや 二番 料 同

一八一 五葉も けく 牡丹 丸 根部

打麦歌

呼喝や麦成打音云々
多田院下緒

今もく湯の屋交部や合歡花 子姪

唐草や日人目より草葺 千調

若布や管束を成れく風の音 同

折今く疎いきくもや辻野元 二五段 不極

若布や管束を成れく風の音 同 一葉

濡布や指作指車寸親の音 不頑

尺分ぬき横布色作 反布色 寸意

けりふきや雲もゆる 水車 名古屋 孤山

ふる輪と云々

戸と守明く申法と雲聚り 尺竹

燐石と云々 輪通の音や相解 根部

石磨も座を別く 葎の音 同

子形水為や 同く云々 同 葎折上云 世風

浪家と云々 同く云々 葎水 浪凡

投うて云々 同く云々 葎草 葎草

石竹の夕立をよふ地ふふ 無論

鳴戸北中や虫足晒美 臨江

知月小子に髪なふくく暑ふ 了安

天王祭

水冬月や流籠となる町の木戸 春調

更衣帯のむらひ月留り 等股

川流や梅子一川 親ふ初 同

^成本形流二川字のく交元受 梅屋

^成紙介り高水う香蒲乾生妻 旭忍

古大尾

文化十二年乙亥

九月廿二日

春秋亭

張海文

